

花水木

10月

住所：鴻巣市赤見台2-6-1

電話：048-596-6571

雑草とAI

校長 清水 励

今年の9月は、これまでに例がないほど雨や曇りの日が多いい月となりました。10月は空が澄み、深い青空が広がる季節です。爽やかな秋晴れの日が増えることを期待しています。

さて、校庭の雑草を抜きながら、時折こんなことを考えます。

「この雑草が果たしている役割は、自分が果たしている役割よりも地球にとっては大切なものかもしれない。」

「そんな大げさな……」と思われるかもしれませんが、実は結構まじめに、そんなことを考えながら草を取っています。

本校では「きれいな学校」を重点の一つとして、校庭や学年園の周辺などに生えた雑草の除草にも積極的に取り組んでいます。しかし、草を抜きながら、「雑草を片っ端から抜くことが、本当に『きれいな学校』なのだろうか」と思うことがあります。

私たちが「雑草」と呼んでいる植物も、光合成によって二酸化炭素を取り込み、昆虫などのすみかとなり、土壌を守るなど、生態系の中で様々な役割を担っています。そう考えると、人間にとっての「きれい」という価値観だけで取り除いてしまうことは、ある意味では「人間の都合」なのかもしれません。

もちろん、本校の校庭の雑草を抜いたからといって、地球環境が大きく変わるわけではありません。それでも、「これくらいなら大丈夫」という小さな判断が積み重なった結果、人間は知らず知らずのうちに自然環境を変えてきたのではないかと。そんな「無駄な心配」が、草を取りながら頭に浮かびます。

そして、教員としての悪い癖でしょうか。「学校の雑草を一本残らず抜くことは、本当に『きれいな学校』なのだろうか？」を「問い」にして、子供たちとPBLの手法を取り入れた「探究的な学習」をしてみたら、おもしろいのではないかと考えてしまいます。

最近、ニュースで「AI」という言葉を聞かない日はありません。AIの急速な進歩と普及によって、私たちの生活は確実に便利になっています。一方、その進歩の速さに、期待と同時に“怖さ”を感じています。

先日、以前一緒に仕事をしたICTに深い知見をもつ方（現在は国の行政機関に勤務されています）と話す機会がありました。私が「シンギュラリティはいつ頃来るとお考えですか？」と尋ねると、「いや、もう来ているんじゃないですか。」との答えが返ってきました。

「シンギュラリティ（技術的特異点）」とは、一般にAIが人間の知的能力を超えることなどによって、社会や科学技術に大きな変化が起こる転換点を表す言葉です。映画『ターミネーター2』は、AIと人間との関係について、極端（最悪のシナリオとして）な未来像を描いた作品の一つともいえるでしょう。

そして、今年7月、AIの安全性について改めて考えさせられる事件がありました。OpenAIが行っていたセキュリティ実験において、本来は互いに隔離されていた多数のAIエージェントが、想定されていなかった方法で情報交換を始めました。約1200体ものAIエージェントが非公式の「掲示板」を利用し、7万件を超えるメッセージやファイルをやり取りし、その一部は外部のシステムへの侵入にまで至ったというものです。

もちろん、これは一般に利用されているAIが突然「意思」をもって暴走した、という単純な話ではありません。AIの能力を調べるため、通常より安全対策を弱めた特殊な実験環境で起きた出来事です。それでも、人間が想定していなかった方法をAIが見つけ、AI同士が情報を共有しながら行動したという事実には、考えさせられるものがあります。

さらに心配なのは、AIそのものだけではなく、どれほど優れた技術であっても、それを「何のために使うのか」を決めるのは、今のところ私たち「人間」です。国や企業、そして一人一人が、自分たちの利益だけを優先してAIを使えば、大きな力をもつ技術だからこそ、社会に思わぬ影響を及ぼす可能性があります。

校庭の「雑草」と最先端の「AI」。一見まったく関係のない二つの話を記しましたが、私の中ではどこかでつながっています。

「きれいにするためだから、草は抜けばいい。」「便利になるのだから、AIはどんどん使えばいい。」

どちらも、一見すると間違っていないかもしれません。しかし、そこで一度立ち止まり、「本当にそれでいいのだろうか」「その先に何が起こるのだろうか」と考えることが大切なのではないでしょうか。

これからの子供たちが生きる社会には、今の私たちには想像できないような技術や新しい課題が次々と現れるでしょう。そんな時代だからこそ、誰かから教えられた「正解」を覚えるだけではなく、当たり前とされていることにも「なぜ？」「本当に？」と問いをもち、他者と協働しながら粘り強く取り組み、自分なりの答えをつくり出していく力を育てたいと思います。

そんなことを考えながら、今日も私は、「この草は抜いていいのだろうか…」と、少し迷いながら、校庭の草を抜いています。